

中学生の語彙指導に関する実証的研究～エラー分析を通して～

佐藤 剛 常盤野中学校

要旨

本研究は、中学生英語学習者 113 名によって書かれた 8 種類の作文をデータ化し、23107 語からなる学習者コーパスを用いてエラー分析することで、初級学習者の語彙使用におけるエラーの傾向と特徴を明らかにし、中学生への語彙指導のあり方を模索する。

その結果、エラーの 20%以上を冠詞の脱落のエラーが占めることが分かった。また、be 動詞の使用に関するエラー、スペルに関するエラーがどのタスクにおいても高頻度で出現するなど初級学習者のエラーのパターンが明らかになった。

【キーワード】 語彙指導 学習者コーパス エラー分析 中学生

1. はじめに

学習者コーパスとは、外国語学習者の算出データを目的に応じて大量に収集、電子化し、教育、研究用のデータとして整備したものである。語彙リストによる総語数や異なり語数などの学習者の語彙使用のパターン、コロケーション分析による単語連鎖の分析から、過小使用語、過大使用語、特徴分析なども可能である。その中でも近年注目を浴びている分野は、大量の学習者の算出データから、その誤りのパターン、傾向を分析しようとする、エラー分析である。学習者コーパスのエラー分析から得られた結果によって、指導者は学習者のエラーをあらかじめ把握した形で指導する事が可能になる。つまり、学習者に課すタスクによって、高頻度で発生する傾向にあるエラーを指導する側があらかじめおさえておくことで、必要に応じて事前に生徒に注意を促したり、場合によっては、そのエラーを防ぐための何らかの教授活動をタスクの前の段階で行うことが可能になる。さらには、エラーを防ぐ形の流れて学習者にライティング学習を進めるというプロセスライティングの理論を活用した教材の開発など、学習者コーパスから得られた結果が英語の授業にもたらすものは、無限の可能性を秘めていると言っても過言ではない。

しかし、現在、学習者コーパスの分析や研究はまだまだ十分に行われていない。それは、学習者コーパスの構築には以下のような困難が伴うためである。一つ目は、学習者と一言にいても、年齢、学習歴、熟達度、性別、母語、言語の使用状況（外国語か第二言語か）など、その背景は非常に多様である。学習者の算出データの集合である学習者コーパスの性格は、それらの変数の影響を大きく受け、必然的に英語学習者全体を反映するコーパスの作成は非常に困難であるといえる。

さらに、学習者コーパスの構築のもうひとつの困難点として挙げられるものとしては、タグ付与などデータ整備にも非常に多くの手間がかかることがあげられる。品詞のタグ付与は、CLAWS に代表される自動タグ付与ソフトが無償で利用可能であるが、エラータグ付与については、一般的なフォーマットもなく、タグ付与は手作業である。研究者は自分の研究の目的に応じて、エラータグを選択し、それをひとつひとつデータに付け加えていくことが求められる。

以上のような理由から、現段階での学習者コーパスの利用は、大規模コーパスによるエラーのパターン一般化というよりはむしろ、研究者が、目的に応じてデータ収集の方法、範囲等を適宜設定し、コーパスを構築し分析を進めるという方法が取られてい

る。石川(2008)は、小規模コーパスの意義について次のことを挙げている。小型のコーパスであっても、自作コーパスを再現性の検証という目的で利用できる。コーパス研究はひとつのコーパスで得られた結果を一般化することには慎重でなくてはならない。BNCクラスの大規模コーパスでも、得られた結果には、一定の言語条件に制約されたものと考えるべきである。その場合、BNCから得られた結果の妥当性や信頼性を検証する方法は、異なるテキストで構成されたコーパスと比較することである。言語にはジャンルやテキストごとに変化する場面と、言語全般にわたって普遍の場面が存在する。仮にBNCで得られた結果と自作コーパスに共通点が見られるとすると結果の一般性、普遍性は飛躍的に高まる。

よって本研究で使用したデータも、被験者は1つの中学校の113名のものであるため、指導者が目の前の学習者のデータを、その実態把握や指導改善のために活用するというアクションリサーチ的なアプローチが現実的であるといえる。また、一般化学習者全体に当てあまると思われる点については先行研究と照らし合わせながら示唆していくという形をとることにする。

2. 先行研究

学習者コーパスに関する先行研究をまとめると、一番大きな結果は日本人の学習者は冠詞の習得が一番遅いということである。日本語に冠詞の概念がないことが原因と考えられる。投野(2000)は、JEFLC コーパスから3万語を抽出し、エラータグ、品詞タグを付与し、エラー分析を起こった。その結果は、代名詞では、中1では格のエラーが多く、高1では数と性の不一致のエラーが多く目立った。高1では文章が長くなるため、前に出てきた事柄を代名詞で次の文につなげようとする傾向が原因。

名詞は、比較的エラーが少なく、平均10%以下の生起率である。中1で格に関するエラーが多い。しかしこれは学年があがるにつれ消失する。また、単複に関するエラーも多く、中1で最も多く、中3まで減少するが、高校に入ってからまた増加する。学年があがるにつれ、使用する名詞や修飾する限定詞の数が増えることが原因ではないか？さらに「語彙選択」では高1で最も高くなり、その他はほぼ同程度であった。話し言葉では上級者に多いエラーであったが、高1で出現するのは興味深い。

動詞では中1でエラーが76%と非常に高く、それ以外では正用率は90%であった。主語と動詞がセットで脱落している場合、be動詞、助動詞、to不定詞の後ろに来る動詞の形にエラーが多い。特に「be動詞+動詞の原形」という組み合わせのエラーは顕著であった。また、人称と数の一致に関するエラーは初学者から低く、6年間変化がないことが分かった。話し言葉とは異なる結果である。書き言葉では人称と数の一致はそれほど困難ではないと考えられる。しかし、このエラーが完全に消失しないことも注目しなくてはならない。

阿部(2003)Standard Speaking Test (SST) の受験者1200人分のデータに基づくNICT JLE コーパスの研究。習熟度の指標と思われる名詞と動詞のエラーに関する項目を明らかにした。初級レベルの学習者は動詞のエラー、上級レベルの学習者は名詞のエラーが多い。習熟度が上がるにつれ、語用法よりも正用法の頻度が増える項目がある。文法項目に関しては正用法との関係に着目したほうがレベル特定に役立つものがある。

3. リサーチクエスチョン

- (1) 学習者はどのようなタイプの間違いを多く起こすか？
- (2) 動詞の使用ではどのような間違いが起こりやすいか？

(3) 各トピックにおいて犯しやすい間違いにはどのようなものがあるか？

4. 研究方法

4-1 被験者

これまで生徒の発表や課題をデータ化し、専用のソフト AntConc で分析する。対象とした生徒は 112 名の中学生。2 年次～3 年次のデータを収集した。コーパス全体の、総語数、異なり語数、総語数に占める異なり語数の割合、平均の文の長さは以下に示すとおり。

- ①総語数 (Total Tokens) : 23107
- ②異なり語数 (Total Types) : 2044
- ③総語数に占める異なり語数の割合 Type-Token Ratio : 0.08
- ④平均の文の長さ : 3.97

4-2 トピック

コーパスは以下の 8 つのトピックから構成されている。いずれも教科書にある活動であり、中学校では多くの現場で行われている活動である。トピックごとの総語数、異なり語数、総語数に占める異なり語数の割合、平均の文の長さは以下に示すとおり。教科書、辞書等の使用は自由。ただし、教師に質問することは認めない。初稿の作品をデータとした。(教師やクラスメイトの校正が入っていないもの)

表 1 学習者コーパスの内訳

データ	夏休み 絵日記	3 年間思 い出	日本文 化紹介	観光地 紹介	影響を受 けた人物	友達紹 介	スキッ ト	将来の 夢
総語数	3127	3865	2445	3087	4416	1401	1184	3582
異なり語数	569	630	322	342	816	208	183	521
T T R	0.18	0.18	0.13	0.11	0.18	0.14	0.15	0.14
平均文長	4.22	4.11	3.94	4.09	3.89	4.01	3.52	3.74

※ T T R : Type/Token Ratio 総語数に占める異なり語の割合

4-3 タグ付与

エラータグは、その利便性から、大和田 (2005) のエラータグを採用した。これは大きく分けて余剰、脱落、選択の 3 種類のエラータグからなる。そして、それぞれに品詞のタイプを付与するという形式のタグである。例えば動詞の選択ミスエラーは <everb>、名詞の脱落エラーは <delnoun>、冠詞の余剰エラーは <redart> となる。これに語順のエラー <wo>、単数/複数エラーの <-pl>、時制のエラー <pst>、<prs> などが主なタグとなっている。通常タグ付与は <X>エラー部分 </x> のように、タグによってエラー箇所を挟む形で付与する。本研究もそれを採用した。例えば (A) のような文に対するエラーに対するタグ付与は、(B) のようになる。

(A) He play tennis park.

(B) He <agr>play</agr> <spm>tenisu</spm> <delprep>in</delprep>
<delart>the</delart> park.

今回はこの大和田 (2005) のエラータグに、初級学習者によく見られるスペルに関

するエラーを示す<spm>を加えた。このエラータグは、**Engrish** のようなスペルの間違いや、**Engurishu** など生徒が英単語を書きたくても書けずに、回避戦略的にローマ字を使用した場合、さらには **Eigo** のように、日本語をそのままローマ字で記述した場合などに付与した。

4-4 分析方法

(1) 学習者はどのようなタイプの間違いを多く起こすか？

ワードリストを作成しエラータグをカウントする。エラータグの頻度が多いミスがより学習者が犯しやすいエラーと考えられる。さらに **AntConc** のコロケーション分析によりでエラータグの後にどのような語句が続くかの頻度を算出。エラーの内容を質的に分析。

(2) 動詞の使用ではどのような間違いが起こりやすいか？

AntConc でエラータグの<everb>動詞の選択エラー、<redverb>動詞の余剰エラー、<delverb>動詞の不足エラーの3種類のエラータグの頻度表を作成する。コンコードンサーを使用して、その後どのような語彙が続くかを検証する。

(3) 各トピックにおいて犯しやすい間違いにはどのようなものがあるか？

トピックごとにエラータグの頻度表を作成する。上と同様に **AntConc** のコロケーション分析によりでエラータグの後にどのような語句が続くかの頻度を算出。

5. 結果

5-1 RQ1「学習者はどのようなタイプのエラーを起こすか？」

コンコードンサー**AntConc** を使用し、学習者コーパスの語彙リストを作成した。エラーの頻度が多い順に並べたものが以下の表2である。

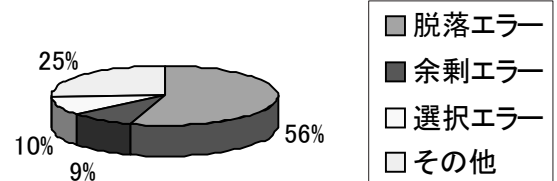
表2 エラータグ頻度リスト

delart	549	everb	83	delmda	27
delprep	224	enoun	60	delconj	26
spm	213	epron	55	deladj	25
delverb	186	redart	51	eprep	20
pst	142	redprep	49	prs	20
delpron	115	delnoun	48	redadv	18
arg	110	wo	36	perf	17
delsub	107	deladv	35	rednoun	15
redverb	97	eadj	35	eobj	5
pl	94	delobj	28	eprop	2

語彙リストを見ると、冠詞の脱落が他のエラーに比べて圧倒的に多いという事が分かる。冠詞の使用の習得が学習者にとって困難であることが一目瞭然である。これは先行研究の結果とも一致している。すべてのエラーの20%以上がこの冠詞の脱落のエラーということになる。それに続いて、前置詞の欠落が多い。そして、動詞の脱落、時制の間違い（過去形を使うべきところに、過去形が使用されていない）、主語・動詞の一致、主語の欠脱落、動詞の余剰などがそれに続く。

また、非常に興味深い点としては、スペルミスや時制のエラーを除けば、エラー頻度表の上位は、冠詞の脱落、前置詞の脱落、動詞の脱落、代名詞の脱落、主語の脱落など、脱落系のエラーによって占められていることがわかる。グラフ 1 から分かるように脱落系のエラーの割合はすべてのエラーの半分以上をしめ、余剰のエラーや選択のエラーの割合は非常に小さい事がわかる。つまり、学習者のエラーの全体像としては、不必要なものが文に含まれたり、適切な語が選択されていないなどではなく、冠詞、前置詞、動詞、代名詞、主語など文の要素があるべきところのないタイプのエラーが半分以上を占めているという事ができる。

グラフ 1



また、初級学習者であるのでスペルのエラーも非常に多い。特に語彙数に非常に制限のある段階であるので、自分が表現したいことと、自分で表現できることとの間に大きなギャップがある事が原因である。授業場面では、生徒がタスクを行ううえで必要になるであろう語彙を事前にこちらでリストにしておいたり、生徒の質問に答える形で提示したりする事が多いのだが、今回のデータは、指導者への質問は禁止であったので、ほとんどの学習者は教科書の巻末の語彙リストを使用していた。しかし、教科書にあらわれる語彙をまとめた巻末の語彙リストでは生徒の書きたい語彙を完璧に網羅しているとはいえない。その際、ほとんどの生徒が、発音や和製英語を手がかりにローマ字で記入していた事が原因であると推測される。

また、時制のエラーとして過去形のエラーがもっとも多いことも興味深い。生徒に貸したタスクにも、夏休みの日記、3年間の思い出、影響を受けた人物など過去形を多く使用する必要があるタスクが多く含まれているというタスク設定に影響を受けている事が理由の一つである。しかし、過去形は時制の中でも使用頻度が多いこと、また、自動化されるまでは意識して使用しなければなかなか習得できないことも原因ではないかと推測される。

それでは、それぞれのエラーをより詳しく見ていくことにする。コーパスサイズの関係でそれぞれのエラータグの出現頻度が非常に小さい。そこで、ある程度分析可能で提案できる頻度で発生している、冠詞の脱落エラー、前置詞の脱落エラー、動詞の脱落エラーの3つを分析対象とする。まず、圧倒的に高頻度で出現する冠詞の脱落であるが、具体的な例としては以下のようなものが挙げられる。

I think that Akita is very good town.

Do you have closet? Yes, I have closet.

My home is restaurant. Name is Washoku Tanpopo.

この後にどのような語彙が続くのかをコンコーダンサーAntConcのコロケーション分析によりエラータグの後にどのような語句が続くかの頻度を算出した。エラータグの後に続く語を調査するので、タグの後3語までという条件をつけ、ソートをかける。表3から分かるように、冠詞の脱落のエラーのほとんどがaの付け忘れである事が分かる。名詞に関していえば、日本文化紹介のrice ball おにぎり、有名人紹介のsinger、観光地紹介のcityなどやはりトピックに大きく左右されている事が分かる。

また、それ以上に注目することとしては、good、very、Japanese、beautiful など副詞、形容詞などがこのエラーと共起していることである。これは、a pen のように冠詞の後に名詞が続くパターンよりはむしろ、a very long pen のように、冠詞と名詞の間に、修飾語が挿入されることによって、冠詞を付け忘れる可能性が高くなるということを示していると思われる。生徒に指導する際に、名詞の前にさまざまな修飾語をつけた形式での練習を行うなどの活動を多く行うなど工夫が必要であると考えられる。

表 3 冠詞の脱落エラーの頻度表

a	195	an	12	club	10
the	44	rice ball	11	beautiful	10
good	32	sea	11	singer	9
very	25	Japanese	10	great	9
I	19	game	10	city	9

次に、エラータグの頻度としての多く見られたものは前置詞の脱落である。どのような前置詞にエラーが多く見られるか表 4 のように、頻度ごとにリストを作成した。もっともエラーの頻度の高い to であるが、その前後にどのような語が続くか検索したところ、左側には want、try、thankful、lucky など右側には動詞が多く出現していることが分かった。つまり、to のエラー頻度が高い原因のひとつに to＋不定詞の用法に多くエラーが発生していることが原因であると考えられる。不定詞は学習者が困難を覚える用法のひとつである。重点的に指導する必要を示唆する結果となった。to に続いてエラー頻度の高い前置詞 in であるが、その後には場所を表す名詞が多く出現している。興味深いのは be 動詞が in の左側に多く出現していることである。これは in を使用する際に I am in Hiroasaki. のように「be 動詞＋in＋場所」の用法でエラーが多く発生することを示唆している。一般的に be 動詞は「～である。～だ。」という意味で使用されることが多く、「ある、いる」という用法を習得しにくいことが原因ではないかと考えられる。

表 4 前置詞のエラーの頻度表

to	24	on	3
in	23	like	3
about	13	from	3
for	11	at	2
with	10	during	2
of	7		

表 5 は、動詞の脱落エラーの頻度リストである。頻度リストを見ると、脱落エラーのほとんどが、be 動詞で起こっており、ほとんどが、is と was である事が分かる。つまり、このことは、本来 be 動詞が使われるべきところに、be 動詞がないという状況である。具体的な例をコーパスデータから抜き出すために、<delverb>is</delverb>から右側 3 語までを抜き出すとさらに興味深い結果が得られる。is の後に続くものとしては以下の 3 パターンである。what I learned from him の後に is を付け忘れるパターン。”I have many friend, so very fun.”のように It is 自体を忘れるパターン、最後は there is/are 構文での be 動詞の付け忘れである。was では written、killed などの過去分詞 skiing

などの現在分詞などがある。be 動詞は、それ単体で補語伴って使用されるだけでなく、以上のようにそのほかにも色々な使い方がある事がこのようなエラーにつながっていると考えられる。

表 5 動詞脱落エラーの頻度表

is	20	wear	2
was	17	put	2
are	6	like	2
want	4	keep	2
were	2	have	2

5-2 RQ2 「動詞の使用ではどのようなエラーが起こりやすいか？」

動詞に関するエラーは、動詞の脱落 (delverb)、動詞の余剰 (redverb)、動詞の選択 (eleverb) の 3 種類である。動詞は情報量が非常に多く、動詞の適切な使用が英語を運用する上で大きな鍵となっている。投野 (2008) も BNC の話し言葉を分析した結果、出現頻度上位 100 語でコーパス全体の 7 割、2000 語で 9 割強がカバーされる。上位 100 語の内訳は基本動詞と機能語で構成される。このことから投野は英語は極めて限られた数の「文の骨格を作る語彙」から作られると主張している。また、冠詞や単数、複数など数のエラーとは異なり、動詞の使用に関わるエラーはコミュニケーションに重大な支障をきたす可能性が高い。

そこで、動詞の使用に関するエラーを分析する。表 6 は以上の 3 種類の動詞のエラーの頻度を示したものである。ここから、動詞のエラーは脱落、余剰、選択ともに is をはじめ be 動詞の使用に関するものであるという事が分かる。

表 6 動詞に関するエラーの頻度リスト

動詞の脱落エラー		動詞の余剰エラー		動詞の選択エラー	
is	20	is	18	is	7
was	17	was	6	were	4
are	6	am	5	was	3
want	4	play	3	plays	2
were	2	are	3	do	2
wear	2	make	2	are	2
put	2	be	2	write	1
like	2	were	1	took	1
keep	2	used	1	talked	1
have	2	spend	1	stay	1

以下に具体例を提示する。

be 動詞の脱落

He a really great baseball player.

He my good friend.

What I learned from him to enjoy basketball.

Her friend volleyball.

be 動詞の余剰

He is began to play baseball.

He is belong to AAA.

He is nickname is Onokun.

It is put fish on rice.

be 動詞の選択

Kyoto is a lot of temples

Hakodate is beautiful night view.

This racket is many memories.

He is a microphone in his left hand.

be 動詞の余剰使用については、一般動詞と併用するエラーがほとんどを占めている。先にも述べたように、be 動詞は「～である」のような叙述的に使用するだけでなく、現在分詞と組み合わせて現在進行形を作ったり、過去分詞と組み合わせて受身形を作るなどさまざまな用法があることがこのエラーの原因であると考えられる。ある程度、be 動詞を使用する文型が出揃う 2 年生後半から 3 年生前半でそれぞれの用法を比較し整理する必要があると思われる。また、トピックやタスクの種類によって、受身形など be 動詞を使用することがあらかじめ予想される場合には、事前に使い方に関して指導を行い、生徒の意識付けをするなど指導の工夫が必要である。また普段から英語を使用する際には、「be 動詞を原形のままの一般動詞といっしょに使用することはない」や「受動態と進行形以外では be 動詞と一般動詞を併用しない」という指導を普段から徹底したり、見直すポイントなどにしておけばこのエラーを未然に防止できると考えられる。

be 動詞の選択エラーは主に have との混同が原因である。have を用いて「～がある」という英語的独特的表現 (e.g. A week has seven days.) は非常に習得が難しい事が原因であると考えられる。この用法を使いそうなトピックを扱う際には同様に、事前に復習するなどの対策を講じる必要がある。

5-3 RQ3 「各トピックにおいて犯しやすいエラーにはどのようなものがあるか？」

各トピックごとにエラータグをカウントした。表 7 は、トピックごとのエラータグ頻度を示したものである。データサイズが非常に小さいので一般化は難しいが、これを分析することで、それぞれのトピックにおいて特徴的に生じるエラーや、類似したエラーの傾向を見出す事ができると考えられる。

やはりここでも、冠詞の脱落のエラーがほとんどすべてのトピックで、圧倒的に高頻度で生じている事がわかる。その次には、トピック間に若干の差はあるものの、前置詞の脱落、動詞の脱落、スペルミス、動詞の脱落などが続いている。しかし、「3 年間の思い出」では冠詞の脱落より、代名詞の脱落、前置詞の脱落、動詞の脱落、スペルミスが冠詞の脱落のエラーより高頻度で出現している事が分かる。このトピックの前置詞の欠落を詳しく分析すると、エラータグの後には friend (friends)、friendship、family、classmate、classroomなどが続いている。多くの場合、家族や友人、クラスメイトに感謝の気持ちを綴ったり、思い出を述べるパターンで使用されているのだが、これに所有格の my が欠落することが多いことがこのエラーの出現頻度が高くなっている理由である。前置詞の欠落の内訳としては for、to、in などがある。for は「3 年間の

思い出」というトピックの性質上、Thank you for〇〇. (～に対してありがとう)、I'm sorry for〇〇. (～に対してごめんね) という文型を多様することが原因であると考えられる。さらに、これらは、日常会話において、forをつけずに、Thank you. I'm sorry. のように単独で使うことが多いこともforの欠落に原因であると考えられる。

また、「将来の夢」や「夏休みの絵日記」のトピックでも高頻度で出現しているスペルに関するエラーだが、これらはタスク遂行をするに当たって、生徒一人一人の自由度が非常に高いトピックである。そのため、必要な語彙も生徒の思い出や、将来の職業によって非常に広範囲に渡る。そのため、teacherやpoliceなど一部の職業以外は、教科書に出てくる語彙だけではカバーしきれない上に、内容によっては指導者も辞書無しでは対応できない職業名や、その職種に関係する専門用語を扱う可能性が高い。前述の通り生徒は今回、教師への質問は許可されていないので、教科書や辞書を頼りにタスクを遂行したわけだが、それでもスペルが分からない場合はローマ字を使用したことがこのエラーの頻度の高さの原因であろうと推測される。

さらに、スピーチであるスキット、友達紹介、観光地紹介の3つでは書き言葉であるほかのトピックでは比較的頻度の低い複数形のエラーが高頻度で出現している事が分かる。これは事前にスクリプトを用意させてのprepared speechであるのだが、発表時はスクリプトを見ることは許可していない。つまり、台本を作成する段階ではある程度、複数形は正確に書けていても、話す段階では付け忘れることが多いことを示唆しているのではないかと考えられる。ただし非常にコーパスサイズが小さいため、あくまで推測の域を出ないことを付け加えておく。

表7 トピックごとのエラー頻度リスト

夏休み絵日記	3年間思い出	日本文化紹介	将来の夢	影響人物	友達紹介	観光地紹介	スキット
delart(98)	delpron(70)	delart(68)	spm(61)	delart(116)	delart(55)	delart(110)	delart(32)
spm(58)	delprep(68)	delprep(32)	delart(32)	delprep(42)	enoun(8)	-pl(26)	-pl(10)
delprep(50)	delverb(53)	spm(18)	delprep(28)	delverb(34)	eproun(8)	delverb(14)	everb(4)
delverb(49)	spm(46)	delverb(12)	delverb(20)	agr(33)	redverb(7)	delsub(10)	delprep(2)
delsub(44)	delart(38)	enoun(10)	everb(12)	pst(26)	-pl(6)	redart(8)	redprep(2)
agr(39)	delsub(31)	redverb(10)	delmda(11)	redverb(24)	wo(6)	spm(8)	rednoun(2)
everb(37)	agr(26)	agr(7)	enoun(10)	spm(18)	agr(5)	everb(6)	
esub(28)	deladj(21)	delmda(6)	-pl(10)	-pl(12)	redart(5)	enoun(4)	
redverb(25)	redprep(20)	delobj(6)	delobj(9)	redart(10)	delpron(4)	redverb(4)	
delnoun(24)	redverb(20)	delsub(6)	delsub(8)	delsub(8)	delverb(4)	redadv(2)	
deladj(20)	eproun(19)	prs(6)	eadj(8)	enoun(8)	redpron(4)	redprep(2)	

6. まとめと教育的示唆

学習者の英作文データの分析から、学習者の英語のエラーの全体像は以下のように集約される。

- ① 冠詞の脱落エラー、とくに不定冠詞の a が脱落することが多い。特に形容詞や、副詞など冠詞と名詞の間に挿入句がある場合に冠詞を付け忘れることが多い。これは投野（2007）など先行研究と一致する結果が得られた。ただし、大学生などの熟達度の高い学習者で高頻度に発生する傾向にある定冠詞 the の欠落が見られないのは、a よりも、the を正確に使用できているということではなく初級学習者である中学生は結束せいのある英文を作れないためにそもそも the の使用自体が

低いためであると考えられる。

- ② 初級学習者であること、運用できる語彙数が非常に限られているため、スペルミスが多く目立つ。特に語彙や文型のフォーマットのない、表現内容の自由度が高いタスクやトピックを扱う時にスペルミスが多くなる傾向にある。このことから、将来の夢など、使用語彙に学習者が困難を覚えると予想される場合には、語彙リストを事前に配布するなどの必要性がある事が分かる。また、このエラーラグをさらに分析する事で、学習者がそれぞれのトピックにおいて書きたくても書けない語彙、つまり必要としている語彙は何であるのかを実証的に解明する事が可能となる。今後の研究対象となる。
- ③ 時制のエラーでは、他の時制を使用する場面で、現在形を使用するエラーが多く目立つ。特に過去形を使用する場面での現在形の使用が多く目立つ。過去、現在、未来とすべての時制が出そろった中学 2 年生以降は、自分はいつの事について表現しているのか、普段から気をつけさせる指導を継続する必要性を示唆している。日本文に「・・・だった」「・・・でした」があれば過去形。「～するつもり」「～でしょう」があれば未来という指導ではなく、現在から見て前のことであれば過去形、これから先のことであれば未来形というレベルで時制を使用できる判断力を基礎として見につけさせることも必要であると思われる。
- ④ さまざまな用法のある語彙に関してエラーが多く発生する。動詞に関するエラーでは、脱落、余剰、選択 3 種類どれに関しても be 動詞に関するエラーが多い。be 動詞は進行形、受身形などさまざまな用法があることがその原因であると考えられる。前置詞では方向や不定詞などで用いられる to に関するエラーが多い。

参考文献

- 阿部真理子 (2003), 「学習者コーパスを利用した中間言語の可変性研究: 日本人英語学習者の話し言葉の分析」, 英語コーパス学会第 22 回大会, 2003.
- 石川慎一郎 (2008), 英語コーパスと言語教育, 大修館.
- 大和田和治, 学習者コーパス, 中野美知子編, 「英語教育グローバルデザイン」, pp. 44-55, 学文社, 2005.
- 投野由紀夫 (2007), 日本人中高生一万人の英語コーパス: 中高生の書く英文の実態とその分析, 小学館, 2007.
- 早稲田大学 CCDL 研究所, Research Reports on Cross-Cultural Distance Learning, Vol.4, pp. 162-172, 2005.
- Granger(2008), Learner Corpus on Computer, Longman, (船城道夫・望月通子 訳), 英語学習者コーパス入門, 研究社, 2008.
- Kazuharu Owada, Masanori Oya, Norifumi Ueda, Tae Yamazaki, Eiichiro Tsutsui, Minako Sunaga, and Michiko Nakano, An Error Tagset and its Application to the Analysis of the Japanese EFL Learner Corpus.
- Kazuharu Owada, Masanori Oya, Norifumi Ueda, Tae Yamazaki, Eiichiro Tsutsui, Minako Sunaga, and Michiko Nakano, Japanese EFL Learners' Self-repairing Strategies: A Corpus Analysis, 早稲田大学 CCDL 研究所, Research Reports on Cross-Cultural Distance Learning, Vol.5, pp. 444-459, 2005.
- Reppen, R.(2001), Corpus linguistics and language teaching, 英語コーパス研究, 8, pp. 19-28.